

中国語母語話者に対する日本語音声指導の一側面 —中国語方言使用とその韻律的特徴—

王 伸子

0. はじめに

外国語の音声習得には、学習者が言語形成期に使用してきた言語が大きく影響する。外国語学習の際に、母語の音声的特徴を代替の手だて（転移—transference）として使うとは限らないということも事実であるが、母語の特徴をそのまま持ち込み、マイナスになる場合（干渉—interference）が少なくないということも否定できない。そこで、学習者の母語に注目し、その特徴を分析したり、日本語との対照研究が試みられるわけだが、学習者の母語という場合、おおむね学校教育で用いられている標準となる言語を指していると思われる。しかし、音声上の観察をする際には、語音や韻律的特徴をも支配する下位方言の存在を見逃すことはできない。本稿ではその下位方言に注目し、日本語学習者の母語のうち、教育の現場でもしばしば問題にされる中国語を母語とする学習者の音声を観察した研究を試みる。

下位方言間に音声上の顕著な差異が認められる中国語を母語としている学習者の場合、その下位方言1が日本語音声の習得にも少なからぬ影響を与えていると考えられる。また、通常、学校教育で用いられている、普通話（プートンホワ）と呼ばれる共通語との、ある意味では二重言語（二重方言）生活をしている者が日本語学習者の大多数を占めているため、そうした二重方言の使用の状況とその意識を、日本にいる学習者を対象に調査することにした。

また、本稿ではさらに、そうした下位方言の音声的特徴が日本語学習に大きく影響するものの一例として韻律的特徴に焦点をあて、実験2としてピッチの分析を試みた。韻律的特徴については、文字等で表すルールもないため、学習者にはそれほど重視されないこともあり、母語の影響を受けやすい。したがって、学習初期の段階で習得されていないと、学習段階が進むにつれ、語彙力や文法の理解力等との間に差が生まれてしまい、アンバランスな運用能力になる恐れが出てくる。しかし、どの学習者も韻律的特徴に問題があるというわけではない。自然な日本語に近い聞こえをもつ発話をする学習者も少なくない。現場における経験的観察では、それが個人的能力差だけではなく、方言まで含めた学習者の母語に大きな関係があるように思われる。そうした例を、いくつかの中国語下位方言を母語とする学習者の音声の観察から具体的にみていく。

1. 実験の目的

実験1では、学習者にとって母語だと意識されている下位方言が、言語使用の中では標準中国語とどのような関係にあるのか2、言語学習という限定された範囲でのコードスイッチについて観察し、さらに、それが外国語学習に影響するのか実験する。学習者はすべて成人であり、文字を介して外国語を学習するので、ある文章を音読させ、それに要する時間を計測するという実験を試みる。下位方言と標準語の使用状況に有意差がみられるかということを観察するためである。

実験2についてだが、学習者の母語である音声の韻律的特徴を明らかにすることの第一の目的は、日本語の韻律的特徴に、あるいは共通の要素がみられるのではないかという予測を持ったからである。中国語を母語とする学習者の日本語音声を観察していると、出身地域で用いている下位方言が、プラスにしるマイナスにしる影響していると思われる特徴が現れる。その中でも、上海方言を母語とする学習者の日本語には、いわゆる日本語らしく聞こえる「らしさ」があると認められる音声表現が多い。とくに、全体的に自然に聞こえる日本語発話をする学習者が多いのも、上海方言を母語とする学習者である。そこで、上海方言と日本語の音声に、転移しても差し支えないような特徴があるのかということを見ながら、同時に、他の方言にはそうした特徴がないのかどうか検証してみたい。

2. 実験の手順

具体的手順としては、まず、中国語の各方言のうち、以下にあげる方言の話者を被験者を選び、その音声を録音する。音声提供者は以下の通りである。

北方方言	a 女	北京出身
	b 男	北京出身
	c 女	新疆ウイグル自治区・ウルムチ出身
	d 男	黒龍江省・ハルピン出身
上海方言	e 男	上海出身
	f 男	上海出身
	g 男	上海出身
	h 女	上海出身
閩南方言	i 女	台湾・屏東出身
	j 女	台湾・台北出身
	k 女	台湾・台北出身
	l 男	台湾・台南出身
広州方言	m 男	マレーシア出身
丹陽方言	n 男	江蘇省・丹陽出身

実験1は、中国語の標準語と下位方言の使用、コードスイッチについてである。まず、北方方言以外の下位方言を使用する被験者に3、標準語と下位方言の、生活上での使用と学校教育での使用について口頭で質問し、回答を得る。被験者本人の言語使用の認識を確かめるためである。その後、中国語新聞の記事の音読をさせ録音し、それに要する時間を計測する。北方方言話者には標準語による音読を、それ以外の下位方言話者には、標準語による音読と下位方言による音読をさせた。

次の実験2は、標準語と下位方言による単文の発話を録音し、韻律的特徴に関わるとされるピッチ等について分析を行った。分析にはパソコン用音声解析ソフト「録聞見」を使用した。

3. 実験1 /コードスイッチに関する音読の実験

3-1. 目的と背景

中国語を母語とし、標準語と下位方言を同様に使用する学習者の場合、日常生活における会話レベルでの標準語と下位方言の使い分けは比較的自由であり、コードスイッチがスムーズに働くようである。しかし、学校教育における言語使用の状況によって、文字を介するものや、数字が関わるものになると、その状況は一様ではない。要するに、外国語学習ではそれがどのように影響するのかということをも予測するために、以下の実験を行う。

3-2. 標準語と下位方言の使用に関する被験者の認識

標準語と下位方言を使い分けている意識があるかどうか、またその実態はどうか、インタビューを行った。質問の内容は以下の通りで、それぞれについて標準語か方言かを選択するものである。

- ①家庭での会話は、標準語か下位方言か
- ②友人との会話は、標準語か下位方言か（同じ方言を共有する友人との場合）
- ③学校教育で用いられるのは、標準語か下位方言か
- ④学校内での普段の会話は、標準語か下位方言か
- ⑤自分自身がより好むのは、標準語か下位方言か

結果は以下に示す表1のようになった。

表1

		①家庭		②友人		③学校教育		④校内		⑤好む方言	
		標準	方言	標準	方言	標準	方言	標準	方言	標準	方言
上海方言	e 男		○		○	○			○		○
	f 男		○		○	○	○		○		○
	g 男		○		○	○			○		○
	h 女		○		○	○			○		○
閩南方言	i 女		○		○	○		○			○
	j 女	○		○		○		○		○	
	k 女	○		○		○		○		○	
	l 男		○		○	○		○	○		○
広州方言	m 男		○		○	○			○		○
丹陽方言	n 男		○		○	○			○		○

まず、標準語と下位方言の使用に関して明確に答えていることから、使い分けているという意識があると判断できる材料を得た。これに基づき、各被験者の意識の傾向を見ていく。使用方

言により地域が限定されてくるので、方言別に観察することが妥当だと思われる。

上海方言の話者は、中国・上海の出身である。①②④⑤には、いずれも方言使用が優先されている。③の学校教育に関しては、ほとんどが標準語だと答えている。被験者 f だけが両方使用すると回答しており、その状況を聞くと、教科によっては上海方言で説明しながら授業を行う教師もいたということであった。

閩南方言の話者は、台湾の出身である。北部（台北）と南部（屏東、台南）の出身者によってその使用状況は分かれているが、台湾における典型的な使用状況を示唆していると考えられる。すなわち、北部、とくに行政、教育等の中心地域である台北では、方言話者の家庭に育っていても、日常生活全般にわたって標準語を用いることが多くなり、本人の言語使用状況も次第に標準語のみを使用するという方に傾きつつあるという様子が現れている。ただ、他の方言使用者の結果と異なるのは、校内における普段の会話も標準語であると全員が回答していることである。これは、台湾の学校教育現場における国語政策の歴史と結果を示すものであろう。現在では、以前に比べさほど標準語を強制する力は強くないとは言え、まだ教育の場、学習の場では標準語だという条件反射的な状況が残っているのだと思われる。

広州方言の話者は、マレーシア出身である。①②④⑤には、いずれも方言使用が優先されている。③の学校教育に関しては標準語であると答えている。この被験者は中華系（華人＝Chinese）の学校で教育を受けているため、学校教育は標準語を使用するものであるが、日常生活では、広州方言、閩南方言、および国語であるマレー語を使用している。

丹陽方言の話者は、中国・江蘇省丹陽の出身である。①②④⑤には、いずれも方言使用が優先されている。③の学校教育に関しては標準語であると答えている。

以上の結果を見ると、それぞれ方言使用地区により、次のように判断されよう。

- ・上海方言

学校教育は標準語で行われることが普通であるが特に制限はなく、その他の私的会話は、聞き手が方言を共有する場合、当該方言を用いることが一般的である。

- ・閩南方言

学校教育は標準語で行われ、さらに校内でも標準語を使用することが一般的である。地域により、台北などでは日常生活も標準語使用の傾向が現れているが、南部では日常生活では方言使用が維持されている。

- ・広州方言

マレーシアの場合、中華系の学校教育では標準語が使用される。日常生活では、聞き手の方言あるいは言語により複数使い分ける。

- ・丹陽方言

学校教育は標準語で行われることが普通であるが特に制限はなく、その他の私的会話は、聞き手が方言を共有する場合、当該方言を用いることが一般的である。

それぞれの被験者の方言使用についての自己認識であるので、その方言話者一般についてはどれだけ正当性があるか、完全に判断することはできないが、以上のように、被験者 j, k 以外は方言を自由に使える話者だという意識を持っていることがわかった。

3-3. 音読材料と音読時間の計測

次に、各方言話者より2名ずつを選び、中国語新聞「人民日報」の記事を標準語音と方言音でそれぞれ朗読してもらい、その時間を計測した。記事は以下のものである。人民日報そのものは簡体字を使用しているが、繁体字で教育を受けてきた者にも不利にならないように繁体字版も作成し、被験者自身が読みやすい方を選択できるようにした。

人民日報（簡体字版）

据新华社、兰州10月31日电。)至1980年国家設立支援经济不发达地区发展资金以来、国家先后給甘肅投放发展資金7.8亿元为甘肅貧困地区经济发展注入了活力。

人民日報（繁体字版）

据新华社、蘭州10月31日電。)至1980年國家設立支援經濟不發達地區發展資金以來、國家先後給甘肅投放發展資金7.8億元為甘肅貧困地區經濟發展注入了活力。

以上の材料を音読してもらい、時間を計測した結果は以下の表2の通りである。a～nは前出の被験者を示し、それぞれ標準語による朗読と各方言による朗読にかかった時間を記した。

表2

		標準語	方言			標準語	方言
北方方言	a	14秒30		閩南方言	i	20秒00	44秒00
	c	13秒25			l	20秒00	44秒00
上海方言	e	15秒46	14秒57	広州方言	m	22秒50	25秒73
	h	17秒08	22秒64	丹陽方言	n	14秒66	14秒52

3-4. 実験1の考察

閩南方言話者では、標準語と方言との使用にかなりの時間差がみられ、方言の場合標準語の倍近い時間がかかっている。他の方言話者ではそれほどの差はみられない。さらに南方言の朗読を観察すると、方言を使用した場合、かなりつまづきながら読んでおり、特に数字の個所では中国語ではなく日本語で読んでしまった場面もあり、完全に切り替えができていないとは言えない。

その原因の一つだと考えられるのが、前述した各被験者の報告にもあるように、学校教育における標準語使用の厳格さではないだろうか。どの地域においても、「読み」を方言音で行う訓練はしていないと考えられるので、その点では条件的にはほぼ同じだと言えよう。異なるのは、学校における私的会話まで標準語で行う方針をとってきた台湾の被験者の場合、「学習」項目となるものは標準語を用いるということが条件反射的に訓練され、その結果、日常レベルでは方言使用の方を好んでいると回答した被験者でさえ、文章の朗読や数字になると標準語という

コードを使うのではないかと推測される。

以上のことから、「学習」項目の一つである外国語学習や音声の習得の際にも、台湾出身の学習者は標準語の発音の影響を受けやすく、他の方言話者は、標準語音と方言音の影響を同程度に受けやすいという仮定に、ある程度の正当性があると判断できよう。なお、このことについてはさらに続けて実験と考察からなる研究が必要だと考えている。

4. 実験2 / 単文発話の音響的分析

4-1. 目的と背景

学習者の日本語による発話が日本語らしく聞こえるか否か、つまり日本語らしさという点には、韻律的特徴が大きく影響していると思われる。そこで、学習者の使用する下位方言がどのような韻律的特徴を持つのか、被験者の方言による発話を音響的に分析した。

4-2. 発話材料と音響的分析

発話する単文には、「我是留学生」（私は留学生です）を用いた。音声資料の録音にはデジタル録音機（SONY DAT）を、音響分析には音声分析ソフト「録聞見」（前出）を用いた。被験者 a～n の実験結果は図1～7のとおりである。

まず、上海方言の発話でピッチ曲線の形を見ると、高低差がはっきりとあらわれ、曲線がなめらかな山型を描いている。他の方言では、閩南方言話者の a のものに、なめらかではっきりとした高低が現れているが、その他の発話は、実際に耳で聞いた印象ではかなり高低差があり、メリハリがあるように聞こえた被験者のものでも、ピッチ曲線で表してみるとそれほど起伏がなく、高いピッチと低いピッチの間にも、そう差がないことが見てとれる。

4-3. 日本語発話の音響特性

次に、日本語の発話ではピッチ曲線がどのようになるのか、「私は日本人です」という文の発話を、中国語と同様に音声分析ソフトを用いて調べてみた。発話者 o（男性）、p（女性）は、ともに東京方言話者である。結果は、図8のようなピッチ曲線となった。

「我是留学生」 (私は留学生です)

图1 北京方言 a, b

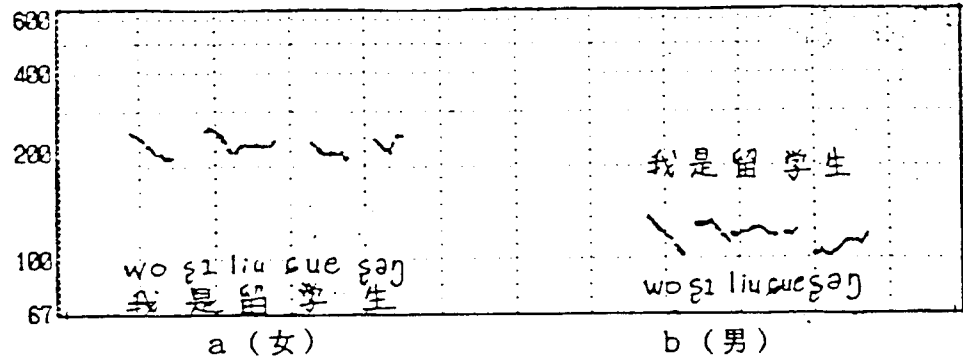


图2 北京方言 c, d

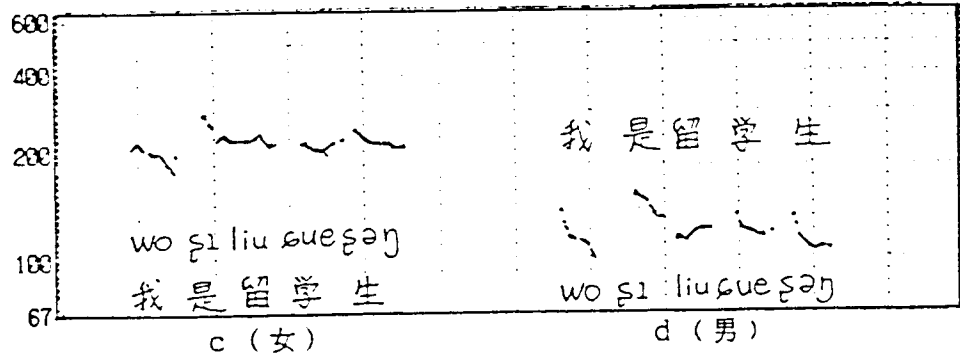


图3 上海方言 e, f

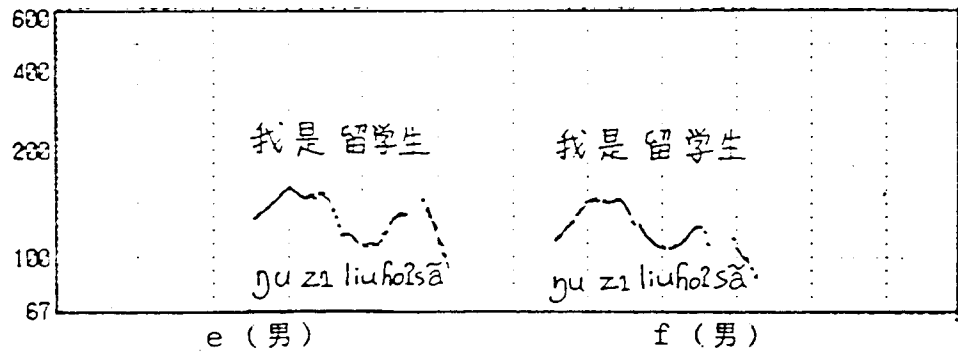
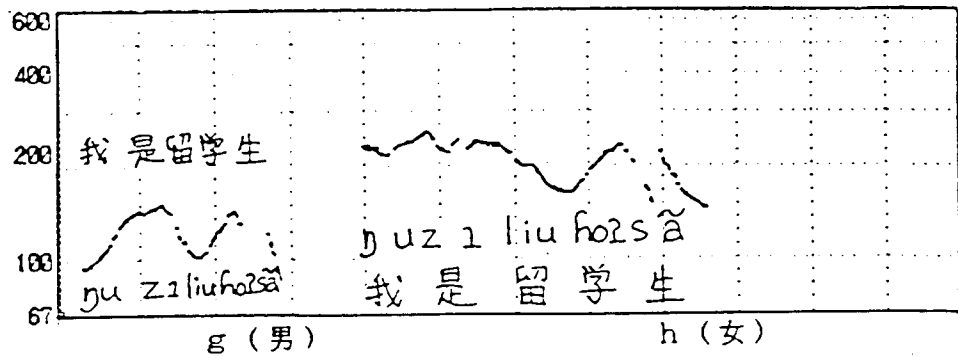


图4 上海方言 g, h



「我是留学生」 (私は留学生です)

図5 閩南方言 i, j

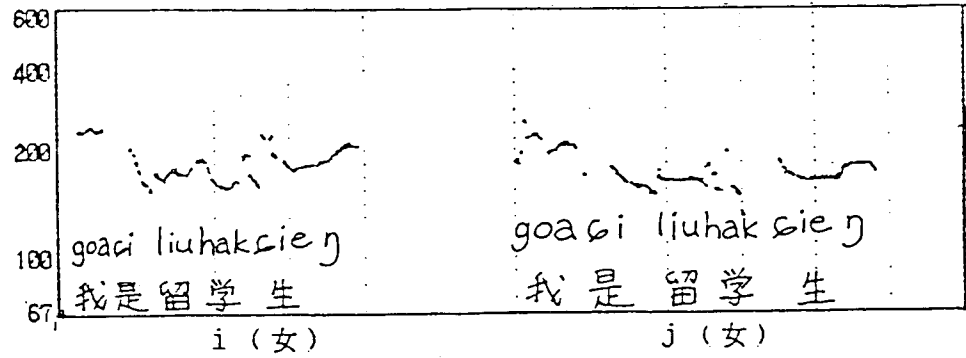


図6 閩南方言 k, l

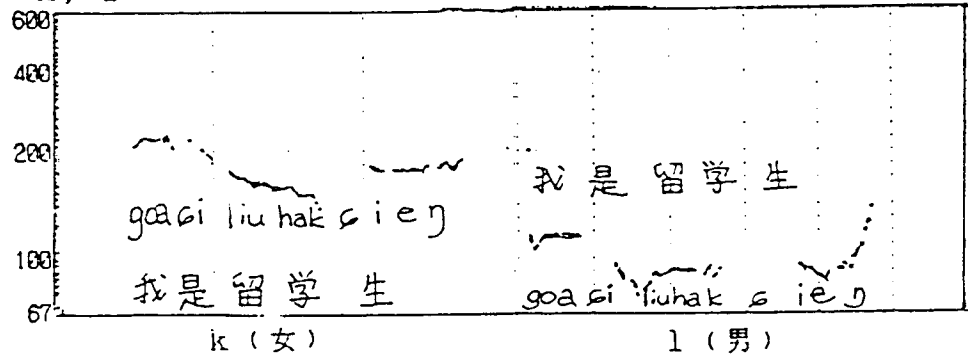


図7 広州方言, 丹陽方言 m, n

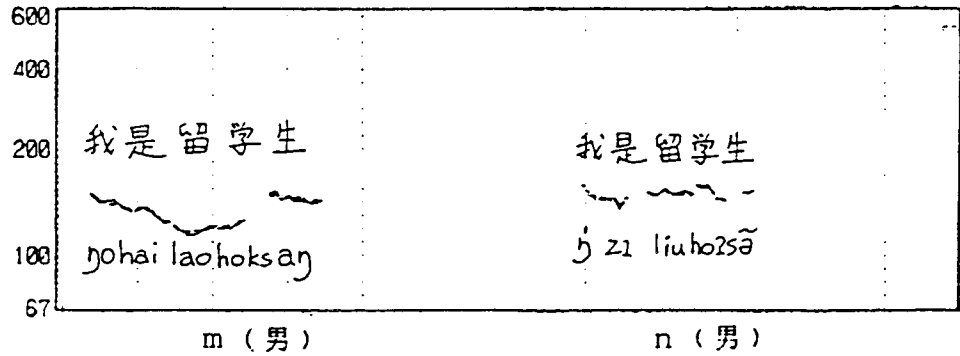
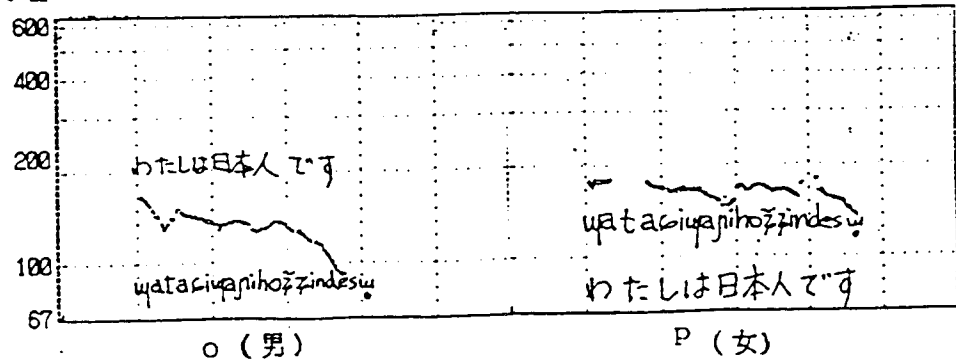


図8 日本語 東京方言 o, p 「私は日本人です」



4-4. 考察

日本語東京方言話者のピッチ曲線は、中国語上海方言のそれと似た、なだらかな山型のピッチ曲線を示す部分のあることが確認された。その山型は、ちょうど「へ」の字のような形をしており、右側でピッチがぐっと下がっている。その部分の頂点と右下部にカーソルを立て、F0の値をとると、上海方言と東京方言では以下のようなになった。

		高	低	差
中国語 (上海方言)	a	161 HZ	112 HZ	49 HZ
		153	93	60
	b	153	106	47
		125	86	39
	c	149	101	48
		140	92	48
日本語 (東京方言)	d	255	165	90
		231	145	86
	o	135	94	41
	p	163	135	28

中国語上海方言では a～c (男性) の場合、その差は約40HZから60HZ、d (女性) の場合、その差は90HZ前後となっている。日本語東京方言では、o、pの発話にあらわれている差は、それぞれ41HZと28HZである。(oは下町出身で、pは山の手出身である。oは元気がよくハッキリとした話し方をする。pの発話は平坦でおとなしく聞こえる) いずれにしろ、文の最後が低く下降しているという、同様の特徴があることが観察された。

5. 結論

以上の結果により、全く異なる言語ではあるが、日本語東京方言と中国語上海方言には同じようなピッチの移動があるという結果を得た。また、実験1の結果により、下位方言である上海方言話者は外国語学習時でも方言音の音声的特徴を学習回路として開いている可能性が高いと推測される。それが上海方言話者の日本語に正の転移となり、上海方言話者の日本語は他の方言話者に比べて自然な日本語らしい聞こえを持つという印象につながるのではないかと思われる。

音声指導の際には、学習者の母語、特に下位方言が何であり、それをどのように生活、学校教育等の環境で用いているかという情報を得ることが、指導の際にも役に立つということが言える。

6. 今後の展望

今回は、日本語学習者(中国語方言話者)による日本語発話の分析を行わなかったため、使用方言が日本語発話に直接影響を与えているという数値的裏付けがとれなかった。今後、さら

にそうした音声資料も分析し、印象的に日本語らしさを持つか持たないかというだけでなく、客観的資料として整えていきたい。

(専修大学)

注

1. 現代中国語方言は、次のような7方言区、すなわち、①北方方言区（北京方言等）②吳方言区（上海方言等）③湘方言区④ΔB方言区⑤客家方言区⑥粵方言区（広州方言等）⑦^a‘方言区（^a‘南方方言等）にわけられる。これらの方言は、その話し手が最も少ないものでも1000万人以上いる。一般に中国語方言は、それぞれ音声の特徴が異なり、一つの方言は他方言話者には難解で、全く通じないものも多い。
2. 基本的なこととして、中国語話者は、標準語である北方方言と、出身地域の方言を併用しているが、使用する環境や聞き手によってほぼ完全に使い分けをしている。例えば、日本の沖縄のように、若年世代では本当の方言はほとんど使えない、というようなことは滅多にないようである。
3. 北方方言は標準語の基礎となる方言であり、日本語で言えば東京方言と標準語との関係に近い。したがって、北方方言話者については質問を省いた。
4. この被験者の日本語発話は極めてなめらかであり、「日本語らしい」聞こえがある。

参考文献

石綿敏雄、高田誠 1990『対照言語学』おうふう

水谷修他編 1991、1992『日本語の韻律にみられる母語の干渉（1）（2）一音響音声学的対照研究一』
文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」平成2、3年度研究成果報告書

大山玄、三浦一郎 1990「日本語学習者のプロソディーに関する研究」『日本語音声の韻律的特徴研究報告』3、文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」研究成果報告書

杉藤美代子 1994『日本語音声の研究1 日本人の声』和泉書院

杉藤美代子編 1989『日本語と日本語教育 第3巻日本語の音声・音韻（下）』明治書院

梅祖麟他 1995『吳語和^a‘語的比較研究』上海教育出版社